

---

# 時計

桐生星男

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

時計

### 【Nコード】

N5118D

### 【作者名】

桐生星男

### 【あらすじ】

会社社長の死に纏わる、男と女の話。女は社長の娘で、男は社長の部下。一つの物語を二人の視点で書いてみました。

## SIDE A 父の娘

この街に帰ってくるのは十年振りだった。

母と兄夫婦はしきりに実家に泊まるよう勧めてくれたけれど、父が死んだ途端待つてましたとばかりに家の敷居を跨ぐのも、何だか格好悪いとゆうかプライドが許さないような気がしたので、断った。駅前はいつの間にか再開発されていて、私は最近出来たばかりだという広いロビーのあるステーションホテルに泊まることにした。

早すぎる父の死。ちょうど二週間前、母から電話があつた。「父さんが加奈と話をしたいって言ってるんだけど……」もしかするとその時すでに、父は何か死の予感のようなものを感じていたのかもしれない。けれど私は、そうするのが当然のように。この十年間ずっとそうしてきたように。父との会話を、拒絶した。

「……ですからね、加奈さん。そういう事ですので、ご理解いただけましたか？」

私の向かい側には、弁護士を名乗る白髪の男と父の部下だったという三十歳くらいの痩せた男が、喪服を着て並んで座っている。遅い時間のせいかホテルのロビーは閑散としていて、広いわりには私達の他にほとんど人影がなかった。

父の葬儀が終わったのは、ついさっき、ほんの二時間くらい前の事だ。傍若無人の塊のような父だったのに、実にあっけなく煙となつて消えた。私は泣きたいような泣けないような、複雑な気分だった。父には何か伝えたい事があつたような気もするけれど、それは私の心の奥深い場所で錘おもしに繋がれ、表面まで浮かんで来る事はなかった。私はまだ父との関係をうまく、整理出来ずにいるのだ。

それなのに、と思う。私は今、薄ら寒いホテルのロビーの一画で顔に神妙を貼り付けたような黒服の男二人と、父の遺産相続の話を

している。

ああ、また、金の話だ……。十年前、事業が軌道に乗りだしてからの父は四六時中、金の話ばかりするようになった。私はそんな父が嫌で家を出たのだけれど、たぶん父は死んでも、今の私の気持ちなど理解できないんだろうと思う。そういう人なのだ、父は。そう思うと私は何だか急に、胸の中で<sup>おり</sup>澱をなしていた積年の怒りが、むくむくと沸き上がって来るのを感じた。

「冗談じゃない！」

思わず口をついた私の声は、思った以上にロビーの中に響いた。若い方の男ははっとしたように私を見つめたが、年寄りの弁護士はいかにも慣れてますという風に取り澄ました微笑を崩さなかった。

冗談じゃない、と今度は心の中で叫んだ。受け取ってなどやらない、誰があんな父の遺産なんか受け取ってやるものか。私が欲しかった物はいつも、お金なんかじゃなかった。お金なんていないから時を戻して欲しい、と思う。まだ会社が小さな町工場だったあの頃、父や工員達が賑やかに裏路地を出入りしていた、貧しくても温かったあの頃の日々に。

「あ、あのお」

それまで黙っていた若い方の男が、おずおずと口を開いた。私は男の方を見た。

「社長……あ、いや、お父様から、加奈さんに預かっているものがあるんです」

父から私に？ 一体何だろう。男は鞆から丁重に包装されたそれを取り出すと、慎重にテーブルの上に置いた。

「これだけは、ちゃんと渡してやりたかったと、最後に社長から頼まれまして……」

それは、アンティークのからくり時計だった。卓上タイプで丁度ウイスキーのボトルを縦横に膨らませたくらいの大きさ。ガラスケースの中には左右に揺れる振子と二体の愛くるしい人形が向き合っ

ている。金色の文字盤には精巧な装飾が施してあり、全体を縁取る真鍮の彫刻と絶妙なアンサンブルを醸し出していた。

忘れもしない。私がまだ小さな子供だった頃。私はよく父に抱き上げられて、工場の事務所の棚に置かれていたこの素敵な置時計を飽きもせず眺めた。午後五時になると時鐘と共にガラスの中の人形達が楽しげに踊りだす。「お、いいなあ加奈ちゃん、お父さんに抱っこされて」「加奈ちゃん、また明日な」奥の工場から、笑顔で帰り支度をする工員達。差し込む夕日、時計の音色、汗と油の匂い……。

直後、長い間忘れていた記憶の一部が、胸の痛みと共に鮮明に私の脳裏に蘇った。<sup>よみがえ</sup> そうだ、確かにもらったのだ。十三歳のとき、旧工場が隣町の大きな新工場へと引っ越す日だった。工員達は名残惜しそくに私にさよならを言い、私は父から、それまでは一度だつて触れさせてくれなかったあの美しい置時計を、もらったのだ。

……それが何故、今ここにあるのだろうか？ 私が「なんで？」という顔で男を見ると、男は目を潤ませて、うんうん、と二つ、大きく頷いた。私は何だか抑えられない衝動に駆られ、置時計を両手にすつと息を吸い込んだ。

## S I D E B 社長の部下

僕は運命論者ではないので一連の出来事がひとえに運命のみの成せる業だったとは思いたくない。しかしそれら一連の出来事に僕の主体性がどれだけ関与していたかというそれはほとんど関与しておらず、だからやっぱりこれは運命の仕業だったのかもしれないと思う。そもそも社長がこんなに早く亡くなった事からして僕の与り知るところではないし、なぜなら僕は社長を殺してないからだからとにかく僕達は出会ってしまった、としか言いようがない。

再会した彼女は素晴らしく美しく成長していた。

彼女はすうつと息を吸うとおもむろに立ち上がり、手に取った置時計を大きく振りかぶって、投げた。それは実にスローモーションな放物線を絵描き、静閑としたロビーに予想通りの大喝音を響かせて粉々に砕け散った。やっぱりな。絶対そうすると思った。絶対投げると思った。彼女の目を見たとき僕はそれを確信し、頷く、覚悟を決め、頷いた。だから僕はそれほど驚かない。となりの老弁護士は、元から何があっても驚かない。

そもそも僕はこの光景を、過去に一度見たことがあるのだ。多分一生忘れはしないだろう。十五年前、そのとき僕は人生で初めての恋に、落ちたのだから。

事の始まりからして僕は納得できなかった。こんな理不尽な話はない。それじゃあ、加奈お嬢さんが可哀想すぎるではないか。鬼だ。鬼社長だ。

「娘の加奈は十年前、男と駆け落ちしたが、そのあと男に捨てられてな」

知っている。社内では有名な話だ。僕は少しだけ失恋の古傷が疼くのを覚えた。

「今でも意地を張っていて、あれから一度も帰って来ないのだ……」

それでな、全く同じものを探し出すのに今までかかったが……。吉井君、是非君の手から渡してやってくれないか。何しろ君は、あのとき、あの場にいたのだからね」

十年という歳月は短いようで長い。こんなものでその溝が埋まるのかどうか。それに、彼女と会うのは何となく躊躇された。過ぎし日の美しい思い出を　一方的な思い出ではあつたけれど　美しいままに留めておきたかったのかもしれない。

「もし無理だと言うのならば、私が死んだあとにでも渡してくれ。いつでも帰って来られるようにな。これは私から加奈への餞だ。はなむけまあ、そう簡単には……」

死なんと思つがな、と言つて社長は笑つたが、間もなくして呆気なく死んだ。

公正証書遺言にはこうあつた。娘、加奈へ以下のものを贈与する。アンティーク置時計、一台。……それだけ。他の財産は全て長男が相続することになっていた。一瞬でも社長の言葉に同調した僕はお人好しだった。社長、あなたは、鬼すぎです。

それを直接告げる役目はとなりの老弁護士だったが、遺言で名指しされた僕も件の置時計を持って同伴していた。はつきり言つて気が重かつた。

「冗談じゃない！」

彼女の打ち震えた声がロビーに響く。ほらな、やつぱり。人間誰だつて金が絡むと変わつてしまふ。だから来たくなかつたのだ。僕の初恋の人よ、あなたはかつて純粹で可憐な少女だった。あの頃、僕はまだ新人の一工員だったね。そして全ては時と共に失われた。覆水盆に帰らず。けれど悪いのはあなたではない、悪いのは全ての鬼社長です！　悪いのは金です！　悪いのは男です！　悪いのは何もしてあげられなかつた僕です！　などと勝手に悦に入っていると、唐突に彼女は、ばんつ、と両手をテーブルに突いて立ち上がった。

「お金なんていりませんから。お金がなくても、私は一人でやっつけます！」

あの日僕は十八歳だった。「何か忘れ物がないか見てこい」と先輩から託り、僕は旧工場に舞い戻った。汗と油臭い旧工場。必要な機器は全て運び終わり、辺りはがらんとして静まり返っていた。事務所の窓からはオレンジ色の夕日が差し込んでいた。

「忘れ物ですか？」

突然、背後から声をかけられた。社長の一人娘、中学一年生になったばかりの加奈ちゃんだった。彼女は度々、裏の自宅からこの工場へ遊びに来た。ここは小さい頃からの彼女の遊び場でもあったのだ。

「いや、ちょっと確認に来ただけだよ。加奈ちゃんも色々と、さみしくなるね」

ええ、と言って彼女は俯いた。彼女は手に、あの見慣れた置時計を持っていた。

「この時計、パパが若い頃、借金までして買ったんです。どうしても欲しかったんですって。ちょっと馬鹿だと思いませんか？」

彼女は口元に笑いを浮かべ愛しそうに時計を見ていた。へえ、高価な時計なんだ、僕が言っていると彼女は、さらさらと髪を分け、僕のほうを見た。

「でもこんなもの、ちっとも欲しくないんです」

彼女はそう言つと夕日を仰ぎ、置時計を両手に　　すつと息を吸い込んだ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5118d/>

---

時計

2010年10月8日15時31分発行